



TICAD7 サイドイベント

# 第7回アフリカで活躍する医師・ 医学研究者の連絡会議

報告書

令和元年9月

一般社団法人アフリカ開発協会

〒102-0094 千代田区紀尾井町4番1号 新紀尾井町ビル3階

Tel.03-3511-8911 Fax.03-3511-8922 URL: [www.afreco.jp](http://www.afreco.jp)

## 「第7回 アフリカで活躍する日本人医師・医学研究者の連絡会議」

日時： 2019年8月27日（火）15：00-17：30

会場： パシフィコ横浜 Annex F201

### 1. ご挨拶

アフリカ開発協会 会長 矢野哲朗

- ・ 本日までのご出席に感謝申し上げます。
- ・ 3年前の TICAD6 の時に、ケニアの武居先生、スーダンの川原先生、ザンビアの山元先生などアフリカで活躍する日本人のお医者様を中心に、横軸にも情報が流れるようにプラットフォームを創ろうと立ち上げたのが当該会議。今回で7回目になる。
- ・ UHC の考えのもと、アフリカの国々で案件を立ち上げて1つ1つ実現していければと考えている。
- ・ 今日の会議では、その流れで形になってきている、ケニアのジョモ・ケニア農工大学との連携、タンザニアのドドマ大学との連携、そしてザンビアでの川原先生の新しい活動について報告をする。他にも報告すべき案件はあり、近い将来形になるだろうと思えるものが5、6件ある。皆さんの意気込みを感じ取ってほしい。
- ・ 今日は JICA の越川副理事長にもお越しいただいているが、JICA のご支援に感謝申し上げます。
- ・ 政府が打ち出した「アフリカ健康構想」に則って、特にアフリカでの人材育成を目指して今後も当該会議を続けていきたい。



### 2. ご挨拶

JICA 副理事長 越川和彦氏



- ・ JICA を代表してご挨拶できることに感謝。
  - ・ TICAD6 の時に、JICA が UHC を世界銀行やグローバルファンド、アフリカ開発銀行と共に、アフリカでの UHC を実現していこうと提唱してから、沢山の進展があったことを嬉しく思う。
  - ・ TICAD7 では「アフリカ健康構想」が打ち上げられたが、これは早急な UHC 達成のための後押しとなる。JICA も一役を担ってきたい。
- ・ 2010 年以来 JICA は、10 のパートナーシッププロジェクトを、また 30 近い基礎調査をアフリカの健康分野で行ってきている。今年は、ある程度医療行為での技術支援ができるようにルールの改正にも取り組んでいる。
- ・ アフリカ開発協会と矢野会長のアフリカへの貢献に感謝申し上げますとともに、本連絡会議が今後のアフリカと日本の関係をより一層深いものにするように期待している。

### 3. ケニア ジョモ・ケニヤツタ農工大学

Dr. Reuben Thuo

・非感染症疾患施設を設立したいと考えて、TICAD6 以来アフリカ開発協会と会合を重ねてきた。大統領の国政における 4 つの柱の 1 つも非感染症疾患に関するものだが、ケニアは医療物理学の点でまだまだ遅れている。

・日本とは 1981 年以来の関係で、様々なプロジェクトで支援を受けている。

・特に以下の分野から手掛けたい：腫瘍、頭部や首、心血管・代謝の疾患、トラウマに関するリサーチ、メディカル・エンジニア。またヘルス・インフォメーション・システムを立ち上げていきたい。

・当該施設を立ち上げることは、地域の人々の健康に貢献するばかりでなく、日本の医療や医療機器を紹介し、将来のビジネスにもつなげることができる。



### 4. ザンビアでの活動開始

NPO ロシナンテス 川原尚行氏

・これまでスーダンで活動を続けてきた。それを受けて、ザンビアでも多面的に衛生・医療が根付く環境と医療そのものを展開していきたい。



・ザンビアでは、出産するにあたり施設分娩が義務化されているので自宅出産はできない。そのため診療所が近くにない遠隔地の人々は、出産が近づくマザーシェルターに滞在する必要がある。が、マザーシェルターそのものが不足している。

・日本のドームハウス（耐熱性が強く、風力にも強い、3 時間で完成する）でマザーシェルターを作ることを構想中。そこに空気中から水を作る給水機を設置し、それに必要な電力は太陽光で、また同時に熊本大学が開発しているデジタル母子手帳の導入を考えている。

・またマザーシェルターが整ったら、スーダンで行ったように、学校を設立し、診療所・病院を建てるという風に規模を大きくしていきたい。

### 5. タンザニア ドドマ大学

Prof. Ipyana Mwampagatu

・首都移転のため今後ますますドドマの人口が増え、様々なニーズが叫ばれるようになる。

・ドドマ大学には大学、大学院レベルで医学、看護学、薬学、科学・薬学研究所があり、今後日本の協力でバイオ・メディカル・エンジニアの学部を立ち上げていく。

・ドドマには大学附属病院の他、ベンヤミン・ムカパ病院（元々ドドマ大学が建てた病院で、2018 年に教育省から保健省に管轄が移行した。病院は大学敷地内に建っている。）や総合病院がある。ムカパ病院では徳洲会と女子医大病院の支援で腎移植を何例も成功させてきた。

・ドドマという街、州の今後の発展を考えると、大学附属病院をもっと充実させていく必要がある。附属病院画像診断所への医療機器の導入、大学での人材育成とカリキュラムの開発、医療産業の発展、そして巡回診療用のバス。

・大学にはすでに日本製の機器、医療機器もありなじみがあることに加え、前述の腎移植の際にはムカパ病院の医師だけでなく大学の医師も参加していて、日本医療への信頼がある。だからこそ、日本との関係を益々強化すべきと考えているし、医療面での発展のために日本に力を貸してほしい。

